2011 年度　活動報告

報告者：関西大学総合情報学部
3 回生　若松奈緒子

◇　カンボジア NGO 協働プロジェクトについて

- 発足
  - 2011 年 4 月
- 活動体制
  - 大学院生：2 名
  - 学部生：14 名
    - 総合情報学部生 11 名、外国語学部生 3 名
- 2011 年 11 月 11 日、名称変更
  - 『J−CAJA（Join- Cambodia Japan）』に決定

◇　活動目的

- 「カンボジア」に焦点を当てた国際的な活動に参加する。
- 体験的な学習からプロジェクトメンバーの成長を図る。
  - NGO の活動内容（社会貢献・国際協力）
  - プロジェクトの企画・運営方法
  - 異文化理解と自文化理解　　など

◇　活動内容

- SSSV プログラム（Short Stay & Short Visit）
  - カンボジアのパニャサストラ大学の学生が日本に訪問し、協働して社会貢献を行う SS プログラムと、日本の関西大学生がカンボジアを訪問する SV プログラムである。
  - 今年度は、2011 年 12 月 10〜17 日の 1 週間、カンボジアのパニャサストラ大学の学生 8 人と先生 1 人が日本を訪問した。
- Re-book
  - 図書館が設置されていない Tropaing Svay 小学校に図書ブースの設置と、図書を管理し、絵本を使った教育を実践するために教師を対象とした研修実施を目的としたカンボジア支援のための取り組みである。
- ひらめきときめき
  - 関西大学の Meet The Grove プロジェクトとの協同により、大阪府の高校生と海外の人たちとの交流を目的とした取り組みである。
- Asian Puja

- ✧ 京都外国語大学との提携により、インドの子どもたちとのスカイプを行ったり、民族衣装で記念撮影、新聞紙や広告を使ったエコバック制作などのワークショップを展開した。
- ➢ 勉強会
  - ✧ 各自が調べた内容をプレゼンテーション、カンボジアの支援団体の輪読、ワークショップをミーティングで行うことによって、カンボジアについての基本的な知識定着を図った。
- ➢ スタディーツアー
  - ✧ 関西大学の学生を対象とした、夏休みのスタディーツアーのスケジューリングなどを行った。
- ➢ ミューズ初等部での交流学習
  - ✧ ミューズ初等部の小学生とカンボジアの人たちとのスカイプ交流の支援を行った。

◇ 活動成果

- ➢ プロジェクト内
  - ✧ 視野の広がり、考え方の転換
    - ● カンボジアの学生との交流によって、日本人とは違うカンボジア学生の考え方を知り、今までは当たり前のことだと思っていたことがカンボジアでは珍しいことであったり、逆に日本では珍しいことがカンボジアでは当たり前のことであったりなど、生活や習慣の違いを感じた。
    - ● 自分たちの知らないところで活動している団体があることに気付くことができた。
  - ✧ 語学力の向上
    - ● カンボジア学生やその他、様々な他国の人と交流する機会が多くあることから、英語を話す機会が多くあり、英語力が伸びた。
    - ● SS プログラムを通じて、言葉によるコミュニケーションの重要性を再認識することができた。
  - ✧ カンボジアについての知識定着
    - ● 今まではカンボジアについて無知だったが、プロジェクト活動内において、勉強会を行うことにより、カンボジアの食や文化・歴史などについて学ぶことができた。
    - ● カンボジア学生との交流によって、カンボジアの日常や学生生活についてなど、文献やインターネットで調べても出てこないようなリアルな部分を知ることができた。
      - ➢ 学校への交通手段はオートバイである
      - ➢ 母国語であるクメール語ではなく英語で授業が行われる　など
- ➢ 連携した団体、人々に対して
  - ✧ 日本について学んでもらう機会の提供
    - ● SSSV プログラムを通じて、カンボジア学生に日本について学んでもらうことができた。
    - ● 一年中の機構が夏であるカンボジア学生に日本の冬を感じてもらったり、日本の学生たちの生活風景や、日本で行われている支援団体との関わりによって、多様な面から日本の生活や支援団体の活動を知ってもらうことができた。
  - ✧ 交流学習の機会提供、支援

- 関西大学初等部の小学生たちがカンボジアの人々と交流する機会を設け、スカイプなどを通じて交流を支援することによって、カンボジアでの生活を知ってもらい、貧困についてなど、自分たちの生活とは違ったカンボジアの生活などを考えてもらうことができた。
- Asian Puja の活動を通じて、インドと日本の子どもたちが交流する支援をすることができた。
- 子どもたちが実際に海外の人々と交流することができる機会を提供した。

➢ 全体を通して

✧ 色々な団体や人との交流により、多くの関係性の構築することができた。

- カンボジアのパニャサストラ大学の学生、先生
- 日本の福祉施設団体、NGO 団体、公立小学校
- カンボジアの NGO 団体
- 他大学生（京都外国語大学の学生など）

✧ これらの繋がり、関わりを次年度の活動に生かす。

◇ 課題、展望

➢ 各個人の課題

✧ 語学力（英語）の不足の認識

- SSSV プログラムを通じて、それぞれで英語の会話力の低さを実感する。
- もっと自分の伝えたい事を話せるようになりたいという気持ち生まれた。

→ミーティング内で英語を話す機会を設ける

- そこで、SV までには英語力を向上しようということで、会議内で英語でコミュニケーションをとる時間を設ける。

✧ 知識不足の認識

- SSSV プログラムより、日本のことを知ってもらえる機会を設けたのにも関わらず、カンボジアの学生たちからの日本に関しての質問に対し、しっかりと答えることができなかった。
- 事前勉強の大切さ、知識不足を実感した。

→カンボジア学生との交流を定期的に行う、勉強会を実施する

- 次回、SV でカンボジアに行く時には、少しでもカンボジアのことを知ってから行こうという目標のもと、会議内で勉強会を実施することを決定。
- 食・教育・観光など、分野ごとに担当を決め、勉強会を実施している。

➢ プロジェクト内

✧ 情報共有、状況把握ができていない

- SSSV プログラムにおいて、今どこで何をしているのかの情報共有が行われていなかったため、プログラムを計画通りに遂行することができなかった。

→情報共有の徹底、Facebook 上での情報共有を行う

- メーリングリストだけではなく、Facebook の掲示板を利用することによって、相互的

に意見交換や活動の交流を行うことができる。

✧　目的意識が薄さから、モチベーションや積極性の異なりに繋がっていた

- 今までは院生の先輩が設けてくださった活動を行っていくことが主であったため、なぜこの活動をしているのか？という個々の活動に対する目的が明確ではなく、またそのことから、メンバーの活動へのモチベーションや積極性に大きな違いが生まれてしまっていた。

→来年度から、学部生を中心に活動を進めていく。

- 学部生が中心になり、活動を進めていく。
- 一つひとつの活動に対し、「なぜこの活動をするのか」という目的を持つ。
- 各自やりたいことを見つける。